

小野寺 功著

『聖霊の神学』

春秋社 二〇〇三年七月二〇日刊
A5判 三九四頁 七六〇〇円＋税

近 藤 剛

著者は「西田哲学を媒介とする日本におけるキリスト教神学の可能性の探究」(一九九頁、以下引用頁は頁数のみを記す)を積年の課題とし、これまでにその具体的な取り組みとして『大地の哲学』(三一書房、一九八三年)、『大地の神学——聖霊論』(行路社、一九九二年)、『評論 賢治・幾多郎・大拙——大地の文学』(春風社、二〇〇一年)、『絶対無と神 京都学派の哲学』(春風社、二〇〇二年)を上梓してきた。著者によれば、「これら一連の作業によってわたしがめざしているのは、直接的には西田・田辺らの日本近代の哲学を日本的霊性の自覚として捉えつつ、キリスト教神学の日本的展開の可能性をさぐることにある。さらにキリスト教をたんなる一神教とみるのではなく、本来的な三位一体論の復権をはかり、伝統的な神概念である「父と子と聖霊」を見直し、とくにこれまで無視されてきた聖霊の役割を強調し、信仰に血を通わせることがわたしの心からの願いである」(九一)との由。本書は、その総集編とでも呼ぶべき労作である。

目次を概観することによって、本書の構成を紹介しておこう(筋立ては省略する)。

第一部 聖霊の宗教

いのちの思想家——賢治・幾多郎・大拙

聖霊をめぐる

絶対無と神——西谷啓治とK・ラーナー

西田哲学から聖霊神学へ

キリスト教の聖霊論的理解

第二部 場の神学

そこからそこへ——アウグスティヌスの三位一体論

「場の神学」序説——場所的論理と聖霊論的思考

絶対無の場所——西田哲学の聖霊論的考察

神人の逆対応

第三部 生成の論理と無の解釈学

聖霊神学と生成の論理——近代超克のための一試論

無の世界の解釈学——生成の論理を媒介として

第四部 一粒の麦

愛は多くの罪を覆う

西田哲学と森信三の全一学

新井奥邃の信仰思想

大拙のマリア観

日本文化とキリスト教

一瞥して明らかなように、本書で扱われているテーマは実に

書評と紹介

幅広く、この小評では全ての内容を取り上げることができない。そこで、重要と思われる議論を取り出すことによって、本書の特徴を明らかにしていきたい。

著者の問題意識は「第一に原点に立ち返って「日本人にとってキリスト教とは何か」を根本的に考え抜こうとする姿勢、これが多くの創造的思考を生み出すのではないかということ。第二は、既成の神学思想を離れて、真のキリスト教体験にもとづく根源的問いをなすこと。第三に近代的思想の特色である主観と客観、精神と肉体、神と人、東洋と西洋、男性と女性、教師と生徒といった対立的二元論を乗り越え、それが一つである場においてすべてのものが成立しているという、この「即」から出発する哲学的立場に立とうとする方針」(三七五)に基づいている。著者の意図をさらに詳しく読み取っていこう。

著者の思索の出発点には、日本におけるキリスト教のインカルチュレーションということがある。著者の理解では、「神学は、ほかならぬ日本人の魂の救済にかかわる主体的真理の学問」(九三―九四)である。ここには輸入学問としての欧米の神学には安住しておれず、日本人独自の神学を構築せねばならないという強い意志が示されている。著者は「日本の神学」の可能性を問う上で、日本的霊性とキリスト教の邂逅に着目している。度々「聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えない」(『コリントの信徒への手紙一』第二章三節)との聖書の章句を引き合いに出して、著者は「聖霊によらなければ」という条件句を重視し、聖霊論への集中を打ち出す。そして、従来のキリスト論を聖霊論的思考の次元へと突破

して、三一論的な生命(いのち)の連関において深く捉え直すことを主張する。「存在の根底に働く神の愛の息吹こそ聖霊であって、その恵みとして与えられた霊性(スピリチュアリテイ)こそ人間性の中核」(三九)である。著者によれば、聖霊や霊性はキリスト教において中心的な役割を果たし、それは日本的霊性に通じる普遍性を持つと説明される。聖霊に導かれた霊性的思考は日本の精神的伝統と深く呼応するということが、「いのちの思想家」と呼ばれる宮沢賢治、鈴木大拙、西田幾多郎の思想を通して論じられていく。とりわけ、西田哲学は「日本的霊性の自覚の論理」と見なされ、キリスト教の再解釈のためには、その援用が必要不可欠であると強調される。

聖霊は主体に対する客体というような対象的な「もの」として扱うことはできず、主観―客観構造において捉えることができない。著者は対象論的思考の限界を指摘し(その背後には、自我を中心とした近代的な人間中心主義への批判がある)、西田哲学の場所的思考を導入する。「聖霊論的思考は、なによりも霊にふさわしいものでなければならず、霊を対象的に客体化することは許されない。それこそ西田のいう対象論理をこえた場所的論理でなければならぬ理由である」(七四)。場所的論理によるキリスト教の再解釈、つまり「場の神学」という構想により、著者は「近代の超克」をも目指そうとする。「聖霊論的思考とその論理の開拓によって、現代思想が直面している諸問題とアポリア―たとえば感性和理性、言葉と霊の衝突の問題や、伝統的知の根本的批判、深層意識の発見、非体系的知の積極的評価などに、いっそう深く全人格的な解決がもたらさ

れるようになる。これこそポスト・モダンの根本問題にほかならない」(六二)。

かつて内村鑑三や新渡戸稲造が日本におけるキリスト教の接木を武士道に求めたように、著者は西田哲学を媒介とし、武士道という接木では担いきれなかった精緻な論理化を遂行しようとする。西田哲学とキリスト教の接点は「三位一体のおいてある場所」に見出される。これは著者によって提起された独創的な概念であり、本書を読み解く鍵概念となる。著者は専ら西田の「場所的論理と宗教的世界観」に依拠し、その要点を「宗教は心靈上の事実である」、「宗教は哲学的には唯、場所的論理によつてのみ把握される」、「新しいキリスト教世界は、「内在的超越のキリスト」によつて開かれるかも知れない」という三点に絞る。そして、西田が洞察した神の世界への超越と内在、神と自己の接合に関する問題などをキリスト教的に解釈しようとする。

著者によれば、西田の場所的論理の基底に置かれた「心靈上の事実」は、鈴木大拙の「靈性の事実」や「自己存在の事実」に相当する。それは知情意一体の靈性的実存という在り方を表現しており、自己成立の根底を開示する。このような「靈性的事実の経験」(純粹経験)に基づいて、西田は絶対と相対の関係を「絶対矛盾的自己同一」と規定する。これは無限、絶対、永遠と有限、相対、時間とが絶対と相反し矛盾するものでありながら、同時に絶対に相離すことのできないものとして統一世界を形成しているのだという事実を意味する。このように自己と世界が存立する「絶対無の場所」において、初めて真実の絶

対者との出会いが可能になる。「有限と無限という絶対に逆なるものが、絶対矛盾的自己同一的に一つであるということは、靈性の場以外においては言えることではなく、これをキリスト教的にみれば、「三位一体の神の場」と捉えるほかはない。ここにおいてはじめて自覚の論理としての絶対矛盾的自己同一と、神の啓示と信仰の論理としての三位一体は、限りなく深く出会うことになる」(六五)。

このように著者は西田哲学の「絶対無の場所」を聖霊論的に解釈する。「わたしは、西田哲学の影響もあつて、父と子と聖霊はともに啓示の神として、絶対有であるという把握は当然であるが、ただ三にして一なる根拠は、有ではなく「絶対無」として把握さるべきだと考える。こうして三位一体のなかに絶対無即絶対有の全一性が確保されることになり、キリスト教的認識は東洋的性格をも抱擁して一段と深まりをみせ、東西の出会いに決定的に貢献することになるはずである」(九〇)。引き続き著者は「絶対無の場所」を主語と述語と繫辞の論理の相互媒介により三位一体的に解釈したり、「三位一体のおいてある場所」の働きの場として鈴木亨の「存在者逆接空」の世界構造を援用したりしており、その斬新な展開は目を見張るものがある。

西田哲学の解釈において著者が重視するのは「内在的超越のキリスト」である。「神はたんなる超越者ではなく、絶対に超越的であるとともに絶対に内在的なものとして、わたしたちの自己が「おいてある場所」を包む、絶対の愛なる神でなければならぬ」(六五)。著者は従来の超越的内在の方向とは逆対応

書評と紹介

的に内在的超越の方向を目指すべきであると主張し、その理由を次のように説明する。「明治以後日本に流入したキリスト教に一番欠けていたものは、この「内在的超越」の方向であり、この両面が打開されて一円周をえがくのでなければ、到底日本の心性にキリスト教が滲透することはありえない。これはキリスト教の日本への適応の問題ではなく、キリスト教自体の深化徹底を意味することにほかならない」(一三三)。

約言すれば、「わたしの志向する霊性的実存の神学は、西田の絶対無の場所を肯定し、それを三位一体の場と考える独自の発想であるが、無の場所とよばれる霊的世界の最深部においては、つねに神の人間に向う運動と人間の神に向う働きがあり、そこから神人性が誕生すると考える。ここにキリスト教のもっとも深い究極の意義がある」(一五三)。内在的超越のキリストは「神人の逆対応」として考察され、その際、ウラジミル・ソロヴィエフの「神人論」(Theanthropology)、滝沢克己の「純粹神人学」、カール・ラーナーの「神の自」譲渡」(Selbstmitteilung Gottes)などの思想が援用される。さらに著者は日本精神史に即して「聖霊の神学」の理論化を図る。例えば、高橋正治の「生成の論理」の解釈学、森信三の「全一学」、新井奥邃の「有神無我」と「二而一」などの思想を取り入れていくが、この展開は著者の独壇場であり、その論理構成を辿ることは容易ではない。紙幅の都合もあることから、逐一の説明は断念する。

以上が本書の概要である。本書の最大の魅力は著者の発想力の斬新さにある。それは「推論というよりも、わたしの根源的

直観」(四九)であるとのことだが、大胆な着想を多くの思想の援用によって「聖霊の神学」にまで組み立てていく議論の展開は迫力があり、強靱な思索力を感じさせる。「日本における典型的キリスト者である内村鑑三の「日本とイエス」という課題を本格的に遂行するためには、外来的宗教のドグマをあてはめたり、聖書を研究しただけでは不十分である。むしろドグマの方を日本人の気質に吸収して、その精神構造の奥深くに組み込まれている真実の生き方としての霊性をくぐり抜けて、実存的に再表現しなければならぬ」(一九一)という著者の姿勢にも賛意を表したい。「感性、理性、霊性の統合体」(一四)として人間を全体的に(根源的に)見ようとする著者の眼差しは、人間が壊れていく時代の中でこそ必要とされるべきであろう。著者の人間理解にも深く共感するところである。また昨今、「日本の神学」への関心が高まっており、活発な議論が展開されている。どのような発想で「日本の神学」を考えるのか、その立場は様々であるが、いずれにしても本書は必ず参照されるべき研究であることは間違いない。このように本書の価値を十分に認めた上で、気になる点を幾つか指摘し、書評者の責務を果たしたい。

まず、形式的な問題から述べる。評者は本書の性格について些か戸惑いを覚えることがある。本書では論文とエッセイが混在しており、専門的学術書なのか啓蒙的著作なのか、はっきりしない。専門的学術書であるためには必要不可欠と思われる註釈、文献表、索引が本書には一切ない。それでいて三編ほどのエッセイを除くと、大半が難解な記述であり、啓蒙的著作と呼

ぶこともできない。専門的学術書に相応しい形式、採録に当たっての選択基準について、ご一考願いたい。

次に内容的な問題に移りたい。打ち出す見解が独創的なものであればあるほど、関連する基本的な議論を踏まえておく必要がある。特に、聖霊論や三一論に関しては膨大な蓄積があり、触れておかねばならない事柄が多く存在する。そこで、神学の観点から個別的な問題を指摘しておきたい。

第一に、ナザレのイエスの不在について。キリスト論の聖霊論的解釈に重点が置かれるあまり、歴史上のイエスが置き去りにされている印象がある。本書で解釈されているような神人論への過度の依存（悉有仏性と見紛うような神人性）は、イエスの出来事の一回性を不要とするのではないか。そうすると、キリスト教の独自性をどこで担保するのか（他の表現を用いれば、「受肉の言葉」をどのように考えるのか）。評者が歴史上のイエスに拘るもう一つの理由は、本書の一連の議論が如何にして歴史へと接続されていくのか判然としなかったからである。「聖霊の遍満する場所」は「絶対無の場所」に限らない。神学の伝統において、聖霊が働く場所は教会（オリゲネス）であり、歴史であり、具体的な形に表れるものである。要するに本書の三位一体は、歴史超越的な内在的三一論に留まっているような気がしてならない。

第二に、「聖霊によらなければ」という条件句を無反省に議論の前提としている点について。聖霊はキリストの名によって神より遣わされる（『ヨハネによる福音書』第四章二六節を参照）という反証も容易に成り立つ（本書にも引用はあるが、

展開が不十分）。聖霊は本質的に子に属するという考え方も有力である。ニケヤ・コンスタンティノポリス信条にある「聖霊が父と子から出られ」（qui ex Patre Filioque procedit）の文言は、キリスト教世界のアキレス腱（聖霊発出論争による東西教会の分断）でもあり、慎重な考察が必要だったはずである。フィリオクエの伝統に対する著者の見解を伺ってみたい。

第三に、「キリスト教関係の本をいくら読んでも、信仰と理性といった図式は出てきますが、聖霊と霊性について扱ったものは皆無といってよいです」（四三）、「ヨーロッパにおける聖霊論の未展開」（五二）、「ヨーロッパにおける聖霊神学の未展開」（六二）という記述について。これらの記述の意図が本書の独創性を強調することにあることは理解できるが、やや違和感を覚える（そもそも本書は『聖霊の神学』を表題としながらも、伝統的な聖霊論に関する考察を欠いており、聖霊の概念を初めて神学的に形成したテルトゥリアヌスの名さえ挙げていないのは疑問である）。一六世紀の霊性主義者、一七世紀のルター派の神秘主義者、一八世紀のドイツ敬虔主義者、シュライアーマッハーなど取り上げる人物は多いと思う。バルトやティリッヒに言及するのであれば、他のプロテスタント神学への目配りも必要であろう。近年、聖霊論を精力的に論じているウルゲン・モルトマン（Jürgen Moltmann, *Der Geist des Lebens: Eine ganzheitliche Pneumatologie*, München: Chr. Kaiser Verlag, 1991）やミヒャエル・ヴェルカー（Michael Welker, *Gottes Geist: Theologie des Heiligen Geistes*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1992）の研究につ

書評と紹介

いて触れないわけにはいかないはずである。とりわけ、モルトマンは「内在的超越」(immanente Transzendenz)の概念を用いて「総体的聖霊論」を展開しており、本書の方向性に資するものがあると思われる。

第四に、人間を「感性、理性、霊性の統合体」(一四)と見る視点について。評者もこの視点の重要性を認めるが、感性と霊性の結び付けが強すぎて、理性は片隅に追いやられている印象を受ける。評者は理性を統制する霊性という見方に活路を見出したいと思っているのであるが、その点を筆者はどのように考えているのか伺ってみたい。また、霊性による理性の統制という発想で忘れてならないのはルター思想である。そもそも、聖霊論を展開する上でルターの意義(あるいは宗教改革における最終的な権威の所在としての聖霊)は大きいと思われるが、本書では全く言及されなかった。

若干の誤植について指摘しておく。「使途」(四一)は「使徒」、「こび言葉」(一〇五)は「この言葉」、「購読」(三〇二、三八〇)は「講読」であろう。本書でインカルチュレーション(inculturation)の訳語は「文化的受肉」となっているが、「文化内受肉」が一般的であろう。インカルチュレーションは文化に適応すること以上に、文化を育成して創造するといった積極的な意味があり、「文化的受肉」という訳語ではそのニュアンスが弱い感じがする。

最後に、本書の全体の講評を批判的に述べる。全体を通して、論述の重複が目立つ。様々な思想家を扱っているのは長所であり、また短所であるような気がする。余りにも多くの事柄

が論じられている。それらの関連性は必ずしも明瞭ではなく、素材が横並びに置かれたままで、一つの結論に収斂されていない印象が残る。やはり、西田哲学を媒介としたキリスト教解釈に議論を集約させるべきではなかったか。そうであれば、より本格的な西田哲学研究が求められるはずであろう(例えば、テキストレベルにおける「場所」や「自覚」の概念に関する緻密な考証)。「試論の範囲」(二三)という記述もあるが、『聖霊の神学』を名乗る以上、著作全体としての整合性や体系性について再考を望みたい(『聖霊の神学 序説』という表題であれば、殊更に指摘することもなかったのであるが)。著者独自の聖霊神学の構築のためには、もう一段階深く掘り下げた体系的展開が要求されるように思われる。今後の議論の進展に期待したい。

私事ながら一言申し添えておく。評者は昨年末に京都で開催された「現代における宗教の役割研究会」で著者の警咳に接する機会を得た。その時、著者より温かな励ましの言葉を与えられ、感動したことを覚えている。評者は、博学な著者が本書で披瀝する知識の全てに通暁しているわけではない。自身の力量を越えた本書の内容に圧倒され、書評の依頼を承諾すべきかどうか躊躇した。しかし、その時の出会いこそ機縁と考え、拙いながらも論評を試みた次第である。本書への批判の中には著者の意図に反するコメントや、評者のプロテストアンティズムの立場に由来する所感が含まれているはずであり、その点については御寛恕願いたいと思う。それは著者のカトリック的心性を知

らずに行われたことではなく、キリスト教全体を見渡し、その調和を願う著者の壮大な構想に感銘し、共感してのことである。これまで独自に歩んでこられた孤高の著者に対して、心より敬意を払いたいと思う。先達の道を辿って次の一步を踏み出すことが研究者の使命であろう。ならば、小野寺氏の背を見て、私も後に続けたいと思う。本書には、そう思わせる力があることを証し、書評を閉じたい。

黒崎 宏著

『ウィトゲンシュタインから龍樹へ』

——私説『中論』——

哲学書房 二〇〇四年八月二〇日刊
四六判 xi+二二〇頁 二二〇〇円＋税

星 川 啓 慈

はじめに

本書は、一言でいうならば、黒崎宏による龍樹（ナーガールジュナ）の『中論』の訳と註釈である。その姿勢は、『中論』を読むにあたって、黒崎ウィトゲンシュタインの視点から可能な限り論理的に整合性を保った読み方をしよう、ということとにある。そして、黒崎の解説の仕方および解説で使用する術語のかなりのものは、西洋哲学やウィトゲンシュタインの哲学からとられており、読者によればひじょうに新鮮に映るだろう。

ウィトゲンシュタイン研究家として名高い黒崎は、これまでも『ウィトゲンシュタインと禅』（一九八七年）、『ウィトゲンシュタインから道元へ』（二〇〇三年）など、主としてウィトゲンシュタインの視点から禅（仏教）に肉薄する仕事をしてきている。本書はさらに、この研究路線を龍樹の『中論』に適用したものである。

黒崎のこの仕事は、一般の仏教学者やインド哲学研究者には